

赤痢

石川啄木

青空文庫

凸凹の石高路、その往還を右左から挿んだ低い茅葺屋根が、
 凡そ六七十もあらう、何の家も、何の家も、古びて、穢くて、壁
 が落ちて、柱が歪んで、隣々に倒り合つて辛々支へてる様に見
 える。家の中には、生木の薪を焚く煙が、物の置所も分明ならぬ
 程に燻つて、それが、日一日、破風から破風と誘ひ合つては、腐
 れた屋根に這つてゐる。両側の狭い浅い溝には、檻縷片や葫蘆
 の切端などがユラユラした泥沈んで、黝黒い水に毒茸
 の様な濁つた泡が、プクプク浮んで流れた。

駐在所の鬚面の巡査、隣村から応援に来た最一人の背のヒヨロ
 高い巡査、三里許りの停車場所在地に開業してゐる古洋服の医師、

赤焦あかちやけた黒縄子の袋袴ふくろはきを穿いた役場の助役、消毒器具を携へた二人の使こづかひ丁、この人数にんすうは、今日も亦家毎に強行診断やを行つて歩いた。空は、仰げば目も眩む程無際限に澄み切つて、塵一片飛ばぬ日和であるが、稀に室外そとを歩いてゐるものは、何れも何れも申合せた様に、心配氣な、浮ばない顔色をして、跔音あしおとを傭ぬすんでる様だ。其家にも、此家にも、怖し氣な面構つらがまをした農夫ひやくしやうや、アイヌ系統によくある、鼻の低い、眼の濁つた、青脹あをぶくれた女などが門口に出て、落着の無い不格好な腰付をして、往還の上下を眺めてゐるが、一人として長く立つてゐるのは無い。小供等さへ高い声も立てない。時偶ときたま、胸に錐でも刺された様な赤児あかごの悲鳴きごゑでも聞えると、隣近所では妙に顔を顰める。素知らぬ態さまをし

てるのは、干からびた塩鰐の頭を引擦つて行く地種の瘦犬、百年も千年も眠つてゐた様な張合のない顔をして、日向で呴呻をしてゐる真黒な猫、往還の中央で媾んでゐる鶏くらゐなもの。村中湿りかへつて、巡査の沓音と佩劍の響が、日一日、人々の心に言ひ難き不安を伝へた。

鼻を刺す石炭酸の臭氣が、何処となく底冷のする空氣に混じて、家々の軒下には夥しく石灰が撒きかけてある。——赤痢病の襲来を蒙つた山間の荒村の、重い恐怖と心痛に充ち満ちた、目もあてられぬ、そして、不愉快な状態は、一度その境を実見したんで無ければ、逆も想像も及ぶまい。平常から、住民の衣食、住——その生活全体を根本から改めさせるか、でなくば、初

発患者の出た時、時を移さず全村を焼いて了ふかするで無ければ、如何に力を尽したとて予防も糞も有つたものでない。三四年前、この村から十里許り隔つた或村に同じ疫が猖獗やまひ しゃうけつ を極めた時、所轄警察署の当時の署長が、大英断を以て全村の交通遮断を行つた事がある。お蔭で他村には伝播しなかつたが、住民の約四分の一が一秋の中に死んだ。尤も、年々何の村でも一人や二人、五人六人の患者の無い年はないが、巧に隠蔽して置いて※牛児の煎薬でも服ませると、何時しか癒つて、格別伝染もしない。それが、万一医師にかゝつて隔離病舎に収容され、巡査が家毎に怒鳴つて歩くとなると、噂の拡ひろがると共に疫が忽ち村中に流行して来る——と、實際村の人は思つてるので、疫其者よりも巡査の方が

忌はれる。初発患者が発見つてから、二月足らずの間に、隔離病舎は狭隘を告げて、更に一軒山蔭の孤家を借り上げ、それも満員といふ形勢で、総人口四百内外の中、初発以来の患者百二名、死亡者二十五名、全癒者四十一名、現患者三十六名、それに今日の診断の結果で復二名増えた。戸数の七割五分は何の家も患者を出し、或家では一家を挙げて隔離病舎に入つた。

秋も既う末——十月下旬の短い日が、何時しかトツブリと暮れて了つて、霜も降るべく鋼鉄色に冴えた空には白々と天の河が横はつた。さらでだに虫の音も絶え果てた冬近い夜の寥しさに、まだ宵ながら家々の戸がピタリと閉つて、通行る人もなく、話声さへ洩れぬ。重い重い不安と心痛が、火光を蔽ひ、門を鎖し、人

の喉を締めて、村は宛然^{さながら}幾十年前に人間の住み棄てた、廃^{すたれむ}郷^らかの様に※乎^{ひつそり}としてゐる。今日は誰々が顔色が悪かつたと、何れ其^{いづ}事のみが住民^{ひとびと}の心に徂徠^{ゆきき}してるのであらう。

其重苦しい沈黙^{だんまり}の中に、何か怖しい思慮^{かんがへ}が不意に閃く様に、北のトツ端^{ぱづれのめ}の倒りかかつた家から、時々パツと火花が往還に散る。それは鍛治屋で、トンカン、トンカンと鉄砧^{かなしき}を擊つ铿^{かた}い響が、地の底まで徹る様に、村の中程まで聞えた。

其隣がお由と呼ばれた寡婦^{やもめ}の家、入口の戸は鎖されたが、店の煤^{すす}び果てた二枚の障子——その処々に、朱筆^{しゆふで}で直した痕の見える平仮名の清書が横に逆様に貼られた——に、火光が映つてゐる。凡そ、村で人気のあるらしく見えるのは、此家と鍛治屋と、南端

近い役場と、雑貨やら酒石油などを商ふ村長の家の四軒に過ぎない。

ガタリ、ガタリと重い轍の音が石高路に鳴つて、今しも停車場通りの空荷馬車が一台、北の方から此村に入つた。荷馬車の上には、スツポリと赤毛布を被つた馬子まごが胡坐あぐらをかいてゐる。と、お由の家の障子に影法師が映つて、張のない声に高く低く節付けた歌が聞える。

『あしきをはらうて、救けたまへ、天理王のみこと。……この世の地ぢと、天とをかたどりて、夫婦をこしらへきたるでな。これはこの世のはじめだし。……一列すまして甘露台。』

歌に伴れて障子の影法師が踊る。妙な手付をして、腰を振り、

足を動かす。或は大きく朦朧^{ぼんやり}乎と映り、或は小く分明^{はつきり}と映る。

『チヨツ。』と馬子は舌鼓^{したうち}した。『フム、また狐の真似演^してらア！』

『オイ、お申^{さる}婆^{ばあ}でねえか？』と、直ぐ再^{また}大きい声を出した。恰度その時、一人の人影が草履の音を忍ばせて、此家に入らうとしたので。『アイサ。』と、人影は暗い軒下に立留つて、四辺を憚^{あたり}る様に答へた。『隣の兄哥^{あにい}か？ 早かつたなす。』

『早く帰^{けえ}つて寝^{こつ}る事^ただ。恁^{こんだ} 時何處^{うろつ}徘徊^{うろつ}くだべえ。天理様^{拝ん}

で赤痢神^{が取付^{とつ}かねえ}だら、ハア、何で医者^{いしや}藥^{すり}が要るものかよ。』

『何さ、ただ、お由嬢^{かかあ}に一寸用^あがあるだで。』と、声を低めて対

手^{ひて}を宥^{なだ}める様に言ふ。

『フム。』と言つた限^{きり}で荷馬車は行過ぎた。

お申婆^{さるばあ}は、軀^{やが}て物静かに戸を開けて、お由の家に姿を隠して了^つた。障子の影法師はまだ踊つてゐる。歌もまだ聞えてゐる。

『よろづよの、せかい一れつみはらせど、むねのはかりたものはない。

『そのはずや、といてきかしたものはない。しらぬが無理ではないわいな。

『このたびは、神がおもてへあらはれて、なにか委細をとききかす。』

横川松太郎は、同じ県下でも遙と南の方の、田の多い、養蚕の盛んな、或村に生れた。生家はその村でも五本の指に数へられる田地持で、父作松と母お安の間の一粒種、甘やかされて育つた故か、体も孱弱く、氣も因循で、学校に入つても、励むでもなく、怠るでもなく、十五の春になつて高等科を卒へたが、別段自ら進んで上の学校に行かうともしなかつた。それなりに十八の歳になつて、村の役場に見習の格で雇書記に入つたが、恰度その頃、暴風の様な勢で以て、天理教が付近一帯の村々に入込んで來た。

或晚、氣弱者のお安が平生になく真剣になつて、天理教の有難い事を父作松に説いたことを、松太郎は今でも記憶してゐる。新しいと名の付くものは何でも嫌ひな旧弊家の、剩に名高い吝嗇

家れだつた作松は、仲々それに応じなかつたが、一月許り経つと、打つて変つた熱心な信者になつて、朝夕仏壇の前で誦げた修証^あ義^{うぎ}が、「あしきを攘^{はら}うて救けたまへ。」の御神樂歌^{みかぐらうた}と代り、大和の国の總本部に参詣して来てからは、自ら思立つてか、唆かされてか、家屋敷^も_ち所有地^{すつ}_{かり}全體^{ぜんたい}売払つて、工事費總額二千九百何十円といふ、巍然^{ぎぜん}たる大会堂を、村の中^{まんなか}央^おの小高い丘陵^{おか}の上に建てた。神道天理教会○○支部といふのがそれで。

その為に、松太郎は両親と共に着のみ着の儘になつて、其会堂の中に布教師と共に住む事になつた。（役場の方は四ヶ月許りで罷^やめて了つた。）最初^{はじめ}、朝晩の礼拝に皆と一緒になつて御神樂を踊らねばならなかつたのには、少からず弱つたもので、気羞しく

て厭だと言つては甚^{どんな}に作松に叱られたか知れない。その父は、半歳程経つて、近所に火事のあつた時、人先に水桶を携^もつて会堂の屋根に上つて、足を辻らして落ちて死んだ。天^{あつぱれ}晴な殉教者だと口を極めて布教師は作松の徳を讃へた。母のお安もそれから又半歳程経つて、脳貧血を起して死んだ。

両親の死んだ時、松太郎は無論涙を流したが、それは然し、悲しいよりも驚いたから泣いたのだ。他^{ひと}から鄭重に悼^{くやみ}辭を言はれると、奈何して俺は左程悲しくないだらうと、それが却つて悲しかつた事もある。其後も矢張その会堂に起^{おき}臥^{ふし}して、天理教の教理、祭式作法、伝道の心得などを学んだが、根が臆病者で、これといふ役にも立たない代り、悪い事はカラ能^{でき}ない性^{たち}なのだから、家を

潰させ、父を殺し、母を死なしめた、その支部長が、平常可愛がつて使つたものだ。また渠は、一体甚人を見ても羨むといふことのない。——羨むには羨んでも、自分も然う成らうといふ心の出ない性で、従つて、食ふに困るではなし、自分が無財産だといふことも左程苦に病まなかつた。時偶、雑誌の口絵で縹緲の好い芸妓の写真を見たり、地方新聞で富家の若旦那の艶聞などを読んだりした時だけは、妙に恁う危険な——実際危険な、例へば、密々とこの会堂や地面を自分の名儀に書変へて、裁判になつても敗けぬ様にして置いて、突然壳飛ばして了はうとか、平常心から敬つてゐる支部長を殺さうとかいふ、まるで全然理由の無い反抗心を抱いたものだが、それも独寝の床に人間並の出来心を起

した時だけの話、夜が明けると何時しか忘れた。

兎角する間に今年の春になると、支部長は、同じ会堂で育て上げた、松太郎初め六人の青年を大和の本部に送つた。其処で三ヶ月修行して、「教師」の資格を得て帰ると、今度は、県下に各自区域を定めて、それぞれ布教に派遣されたのだ。

さらでだに元気の無い、色沢の悪い顔を、土埃と汗に汚なくして、小さい竹行李二箇を前後に肩に掛け、紺絣の單衣の裾を高々と端折り、重い物でも曳擦る様な足調で、松太郎が初めて南の方からこの村に入つたのは、雲一つ無い暑熱盛りの、恰度八月の十日、赤い赤い日が徐々西の山に辻りかけた頃であつた。松太郎は、二十四といふ齡こそ人並に喰つてはゐるが、生

つきの氣弱者、経験のない一人旅に今朝から七里余の知らない路を辿つたので、心の臍までも疲れ切つてゐた。三日、四日と少しは慣れたものの、腹に一物も無くなつては、「考へて見れば目的の無い旅だ!」と言つた様な、朦朧乎した悲哀が、粘々した唾と共に湧いた。それで、村の入口に入るや否や、吠えかかる瘦犬を半分無意識に怖い顔をして睨み乍ら、脹けた様な頭脳を搾り、有らん限りの智慧と勇気を集中めて、「兎も角も、宿を見付ける事だ。」と決心した。そして、口が自からポカンと開いたも心付かず、臆病らしい眼を怯々然と両側の家に配つて、到頭、村も端近くなつた辺で、三国屋といふ木賃宿の招牌を見付けた時は、渠には既う、現世に何の希望も無かつた。

翌朝目を覚ました時は、合宿を頼まれた二人——六十位の、頭の禿げた、鼻の赤い、不安な眼付をした老爺おやぢと其娘だといふ四五の、旅疲勞たびづかれの故せゐか張合のない淋しい顔の、其癖何処か小意氣に見える女。（何処から来て何処へ行くのか知らないが、路銀の補助たしに売つて歩くといふ安筆を、松太郎も勧められて一本買つた。）——その二人は既もう発つて了つて、穢きたない室へやの、補布つぎだけな五六の蚊帳かやすみの隅すみこに、脚を一本蚊帳の外に投出して、仰あふけに臥てゐた。と、渠は、前夜同じ蚊帳に寝た女の寝息や寝返りの氣勢に酷く弱い頭脳を悩まされて、夜更まで寝付けられなかつた事も忘れて、慌てて枕の下の財布を取出して見た。変りが無い。すると又、突然いきなふんどひどつ裨とびだ一点で蚊帳の外に跳出したが、自分の荷物は寝る時

の儘で壁側にある。ホツと安心したが、猶念の為に内部なかを調べて見ると、矢張変りが無い。「フフヽヽ」と笑つて見た。

「さて、奈何どう為ようかな?」恁かう渠かれは、額に八の字を寄せ、夥おほしく蚊に喰はれた脚や、蚤のみに攻められて一面に紅らんだ横よこ腹ばらを自棄やけに搔き乍ら、考へ出した。昨日着いた時から、火傷やけどか何かで左手の指が皆内側に屈まがつた宿かかあの嬪もてなしの待遇振ぶりが、案外親切だつたもんだから、松太郎は理由もなく此村が氣に入つて、一つ此地ここで伝道して見ようかと思つてゐたのだ。「さて、奈何どう為ようかな。」

恁かう何回も何回も自分に問うて見て、仲々決心が付かない。「奈何どう為よう。奈何どう為よう。」と、終ひには少し懊ぢれつたくなつて来て、愈々以て決心が付かなくなつた。と言つて、発たうといふ氣は微

塵もないのだ。「兎も角も。」この男の考へ事は何時でも此処に落つる。「兎も角も、村の状態を見て来る事に為よう。」と決めて、朝飯が済むと、宿の下駄を借りて戸外に出た。

前日通行つた時は百二三十戸も有らうと思つたのが数へて見ると六十九戸しか無かつた。それが又穢きたない家許りだ。松太郎は心に喜んだ、何がなしに氣強くなつて來た。かれ渠には自信といふものが無い。自信は無くとも伝道は為なければならぬ。それには、可成狭い土地で、そして可成教育のある人の居ない方が可いのだ。宿に帰つて、早速亭主を呼んで訊いて見ると、案の如く天理教はまだ入込んでゐないと言ふ。そこで松太郎は、出来るだけ勿体もつたいを付けて自分の計画を打ち明けて見た。

三国屋の亭主といふのは、長らく役場の使丁をした男で、
 身長が五尺に一寸も足らぬ不具者、齡は四十を越してゐるが、
 鬚一本あるでなし、額の小皺を見なれば、まだホンの小若者と
 しか見えない。小鼻が両方から吸込まれて、物云ふ声が際立つて
 鼻にかかる。それが、『然うだなツす……』と、小苦面に首を傾
 げて聞いてゐたが、松太郎の話が終ると、『何しろハア。今年ア
 作が良くねえだハンテな。奈何だべなア！ 神様さア喜捨る錢あげぜにか
 金ねが有つたら石油あぶらでも買ふべえドラ。』

『それがな。』と、松太郎は臆病な眼付をして、
 『何もその錢金の費る事かかで無えのだ。私は其そんなもの
 宿料を払つてゐて、一週間なり十日なり、無料ただで近所の人達に聞

かして上げるのだツさ、今のその、有難いお話な。』

氣乗りのしなかつた亭主も、一週間分の前金を出されて初めて納得して、それからは多少言葉使ひも改めた。兎も角も今夜から近所の人を集めて呉れるといふ事に相談が纏つた。日の暮れるのが待遠でもあり、心配でもあつた。集つたのは女小供が合せて二三人、それに大工の弟子の三太といふ若者、鍛冶屋の重兵衛。

松太郎は暑いに拘らず木綿の紋付羽織を着て、杉の葉の蚊遣の煙を渋団扇で追ひ乍ら、教祖島村美支子みきこの一代記から、ひとつほり一通の教理まで、重々しい力の無い声に出来るだけ抑揚をつけて諄々と説いたものだ。

『ハハア、そのお人も矢張りお嫁様に行つたのだなツす?』と、

乳児を抱いて来た娘が訊いた。

『左様さ。』と松太郎は額の汗を手拭で拭いて、『お美支様が恰度十四歳に成られた時にな、庄屋敷村のお生家から三昧田村の中山家へ御入輿に成つた。有難いお話でな。その時お持になつた色々の調度、箆笥、長持、總てで以て十四荷——一荷は一担ぎで、畢竟平たく言へば十四担ぎ有つたと申す事ぢや。』『ハハア、有難い事だなツす。』と、意外ところに感心して、『ナントお前様、此地方ではハア、今の村長様の娘様でせえ、箆笥が唯三竿——、否全体で三竿でその中の一竿はハア、古い長持だつけがなツす。』

二日目の晩は嬢共は一人も見えず、前夜話半ばに居眠をして行

つた小供連と、鍛治屋の重兵衛、三太が二三人朋輩を伴れて來た。
 その若者が何彼なにかと冷評ひやかしかけるのを、眇めつ目かちの重兵衛が大きい眼
 玉を剥むいて叱り付けた。そして、自分一人夜更まで残つた。

三日目は、午頃ひるごろからの雨、蚊が皆家の中に籠つた点燈頃ひとつもしごろに、

重兵衛一人、麦煎餅を五錢代許り買つて遣つて來た。大体の話は
 為て了つたので、此夜は主に重兵衛の方から、種々の問を發した。
 それが、人間は死ねば奈何なるとか、天理教を信ずるとお寺詣り
 が出来ないとか、天理王の命も魚籃觀音の様に、仮に人間の形に
 現れて蒼生ひとを濟度する事があるかとか、概して教理に関する問題
 を、鹿爪らしい顔をして訊くのであつたが、松太郎の煮切らぬ答
 弁にも多少得る所があつたかして、

『然うするとな、先生、（と、此時から松太郎を恁かう呼ぶ事にし
た、）俺にも余程天理教の有難え事が解つて來た様だな。耶蘇
は西洋、仏様は天竺、皆渡來物だが、天理様は日本で出来た神
様だなツす？』

『左様さ。兎角自國のもんでないと悪いでな。加之何なのぢや、
それ、國常立尊くにとこたちのみこと、國狭槌尊くにのさづちのみこと、豊斟渟尊とよくむぬのみこと、大苦
辺尊べのみこと、面足尊おもだるのみこと、惶根尊かしこねのみこと、伊弉諾尊いざなぎのみこと、伊弉
冊尊こと、それから大日靈尊おほひるめのみこと、月夜見尊つきよみのみこと、この十柱の神
様はな、何れも皆立派な美德を具へた神様達ぢやが、わが天理王
の命と申すは、何と有難い事でな、この十柱の神様の美德を悉しつか
皆具へて御座る。』

『成程。それで何かな、先生、お前様^{めえさま}は一人でも此村に信者が出来ると、何処へも行かねえて言つたけが、真箇かな? それ聞かねえと意外^{とんだ}ブマ見るだ。』

『真箇ともさ。』

『真箇かな?』

『真箇ともさ。』

『愈々真箇かな?』

『ハテ、奈何して嘘なもんかなア。』と言ひは言つたが、松太郎、余り諄く訊かれるので何がなしに二の足を踏みたくなつた。

『先生、そんたらハア、』と、重兵衛は突然^{いきなり}膝を乗出した。
『俺^{おら}が成つてやるだ。今夜から。』

『信者にか?』と、鈍い眼が俄かに輝く。

『然うせえ。外に何になるだア!』

『重兵衛さん、そら真箇かな?』と、松太郎は筒抜けた様な驚喜の声を放つた。三日目に信者が出来る、それは渠の全く予想しなかつた所、否、渠は何時、自分の伝道によつて信者が出来るといふ確信を持つた事があるか?

この鍛冶屋の重兵衛といふのは、針の様な鬚を顔一面にモヂヤモヂヤさした、それはそれは逞しい六尺近の大男で、左の眼が潰された、『眇目鍛治』と小供等が呼ぶ。齢は今年五十二とやら、以前十里許り離れた某町に住つてゐたが、鉈、鎌、鍬などの荒道具が得意な代り、此人の鍛つた包丁は刃が脆いといふ評判、結局は

其土地を喰詰めて、五年前にこの村に移つた。他所者といふが第一、加之それに頑固いつこくで、片意地で、お世辞一つ言はぬ性たちなもんだから、兎角村人に親みしたしが薄い。重兵衛それが平生ひふうの遺恨で、些ちよいどした手紙位は手づから書けるを自慢に、益々頭ひが高くなつた。規定以外の村の費目いりめの割当などに、最先まつさきに苦情を言出すのは此人に限る。其處へ以て松太郎が來た。聴いて見ると間違つた理屈でもなし、村寺の酒飲和尚さけのみおしゃうよりは神々の名も沢山に知つてゐる。天理様の有難味のみこも了解のみこんで了解めぬことが無さきうだ。好矣よし、俺おらが一番先に信者になつて、村の衆の鼻毛を抜いてやらうと、初めて松太郎の話を聴いた晩に寝床の中で度胸を決めて了つたのだ。尤も、重兵衛の遠縁の親戚きよが二軒、遙とと隔つた処にゐて、既とうから

天理教に帰依してゐるといふ事は、予て手紙で知つてもゐ、一昨年の暮弟の家に不幸のあつた時、その親戚からも人が来て重兵衛も改宗を勧められた事があつた。但し此事は松太郎に對して嘵おくびにも出さなかつた。

翌朝、松太郎は早速○○支部に宛てて手紙を出した。四五日経つて返書が来た。その返書は、松太郎が逸いちはやく信者を得た事を祝して其伝道の前途を励まし、この村に寄留したいといふ希望を聽許ゆるした上に、今後伝道費として毎月金五円宛送る旨を書き添へてあつた。松太郎はそれを重兵衛に示して喜ばした上で、恁かういふ相談を持掛けた。

『奈何どうだらうな、重兵衛さん。三国屋に居ると何の彼ので日に十

五銭宛貪とられるがな。そすると月に積つて四円五十銭で、私は五十銭しか小遣が残らなくなるでな。些すこし困るのぢや。私は神様に使はれる身分で、何も食物の事など構はんのぢやが、稗ひえ飯めしでも構はんによつて、モツト安く泊める家うちがあるまいかな。奈何だらうな、重兵衛さん、私は貴方わしあんた一人が手頬たよりぢやが……』

『然うだなア！』と、重兵衛は重々しく首を傾げて、薪雜棒まきざつぼうの様な両腕こまねを拱いだ。月四円五十銭は成程この村にしては高い。それより安くても泊めて呉れさうな家が、那家あそこ、那家あそこと二三軒心に無いではない。が、重兵衛は何事にまれ此方から頭を下げて他人ひとに頼む事は嫌ひなのだ。

翌朝、家が見付かつたと言つて重兵衛が遣つて來た。それは鎧

治屋の隣りのお由寡婦よしやもめが家、月三円で、その代り粟八分の飯で忍が
耐まんしろと言ふ。口に似合はぬ親切な野爺おやぢだと、松太郎は心に感謝
した。

『で、何かな、そのお由といふ寡婦やもめさんは全くの独身住ひとりずみかな?』

『然うせえ。』

『左様か。それで齡とは老つてるだらうな?』

『ワツハハ。心配しんぱいする事ア無ねえ、先生。齡ア四十一だべえが、
村一番の醜婦みたくないの巨女おほをなごだア、加之それにハア、酒を飲めば一升も
飲むし、甚どんな男も手余てやましにする位くれいの悪醉語壇ごんぼうほりだで。』と、嚇かす
様に言つたが、重兵衛は、眼を円くして驚く松太郎の顔を見ると
俄かに氣を変へて、

『そだどもな、根が正直者だおの、結句氣楽な女せえ喃。』

善は急げと、其日すぐお由の家に移転^{うつ}つた。重兵衛の後に跟^ついて怖々入つて来る松太郎を見ると、生柴^{なましば}を大炉^{おぼろ}に折燻^{をりく}べてフウフウ吹いてゐたお由は、突然^{いきなり}、

『お前^{めえ}が、俺^{おらどこ}許さ泊めて呉^けろづな?』と、無遠慮に叱る様に言ふ。

『左様さ。私はな……』と、松太郎は少許狼狽^{すこしうろた}へて、諄々^{くどくど}初対面の挨拶^{あいさつ}をすると、

『何有^{なあに}ハア、月々三両せえ出せば、死^{くたば}るまででも置いて遣^やべえどら。』

ひつこしいはひ
移 転 祝 の積りで、重兵衛が酒を五合買つて來た。二人はお

由にも天理教に入ることを勧めた。

『何有^{なあに}ハア、俺^{おら}みたいな悪党^{あくとうをなご}女^{をな}にや神様も仏様も死^{くたば}る時で無^ねえば用ア無^なえどもな。何だべえせえ、自分の居^{とこ}ツ家^そが然^そでなかつたら具合^{ぐあい}が悪かんべえが? 然^そだらハア、俺^{おら}ア酒^{さけ}え飲^むのさ邪魔^{くわい}さねえば、何方^{どつち}でも可^いどら。』

と、お由は、黒漿^{おはぐろ}の剥げた穢い歯^{むきだし}を露出^{むきだし}にして、ワツハヽヽと男の様に笑つたものだ。鍛冶屋^{かじや}の門と此の家の門に、『神道天理教会』と書いた、丈五寸許りの、硝子^はを嵌めた表札が掲げられた。

二三日経つてから的事、為^{しやうこと}様事^なしの松太郎はブラリと宿を出て、其処此処に赤い百合の花の咲いた畑^{はたけみち}徑^{みち}を、唯一人東山

へ登つて見た。何の風情もない、饅頭笠まんぢうがさを伏せた様な芝山で、透迤うねくねした徑みちが嶺いただきに尽きると、太い杉の樹が壘すくすく々々と、八九本立つてゐて、二間四方の荒れ果てた愛宕神社の祠ほこら。

その祠の階段に腰を掛けると、此処よりは少許低目の、同じ形の西山に正面まともに對合むかひあつた。間が浅い凹地くぼちになつて、浮世の廃道と謂つた様な、塵白く、石多い、通行少い往還とほりが、其底を一直線ましぐらに貫いてゐる。両の丘陵は中腹から耕されて、夷なだらかな勾配を作つた畠が家々の裏口まで迫つた。村が一目に瞰下みおろされる。

その往還にも、昔は、電信柱が行儀よく列んで、毎日午近ひるになると、調子面白い喇叭ラッパの音を澄んだ山國の空気に響かせて、赤く黄く塗つた円太郎馬車が、南から北から、勇しくこの村に躍込

んだものだ。その喇叭の音は、二十年来^{はた}礪と聞こえずなつた。隣村に停車場が出来てから通行^{とほり}が絶えて、電信柱さへ何日しか取除^ぞかれたので。

その時代^{ころ}は又、村に相応^{はたごや}な旅籠屋^{はたごや}も三四軒あり、倅も十輛近くあつた。荷馬車と駄馬は家毎の様に置かれ、畠仕事は女の内職の様に閑却されて、旅人^{あひて}対手の渡世だけに収入^{みいり}も多く人気も立つてゐた。夏になれば氷屋の店も張られた。——それもこれも今は纔^{わづ}かに、老人達^{としよりたち}の追憶談^{むかしばなし}に残つて、村は年毎に、宛然^{さながら}藁火の消えてゆく様に衰へた。生業^{なりはひ}は奪はれ、税金は高くなり、諸式は騰り^{あが}り、増えるのは小供^{たつた}許り。唯一輛残つてゐた倅の持主は五年前に死んで曳く人なく、轆^{かじ}の折れた其倅は、遂この頃まで其家の

裏井戸の側わきで見懸けられたものだ。旅籠屋であつた大きい二階建の、その二階の格子が、折れたり歪んだり、昼でも鼠が其処に遊んでゐる。今では三国屋といふ木賃が唯一軒。

松太郎は、其そんな事は知らぬ。血の氣の薄い、張合の無い、気病の後の様な弛たるんだ顔に眩まぶしい午後の日を受けて、物珍らし相にこの村を瞰下みおろしてみると、不図、生うまれむら村の父親おやぢの建てた会堂の丘から、その村を見渡した時の心地が胸に浮んだ。

取留のない空想が一団に湧いた。愚さの故でもあらう、汗ばんだ、生き甲斐のない顔色が少許色ばんで、鈍い眼も輝いて來た。渠は、自己一人の力でこの村を教化し尽した勝利の暁の今迄遂ぞ夢にだに見なかつた大いなる歎よろこび喜を心に描き出した。

「会堂が那処に建つ！」と、屹と西山の嶺に瞳を据ゑる。

「然うだ、那処に建つ！」恁う思つただけで、松太郎の目には、その、純白な、絵に見る城の様な、数知れぬ窓のある、巍然たる大殿堂が鮮かに浮んで来た。その高い、高い天蓋の尖端、それに、朝日が最初の光を投げ、夕日が最後の光を懸ける……。

渠は又、近所の誰彼、見知越の少年共を、自分が生村の会堂で育てられた如く、育てて、教へて……と考へて来て、周囲に人無きを幸ひ、其等に対する時の厳かな態度をして見た。

『抑々天理教といふものはな——』

と、自分の教へられた支部長の声色を使つて、眼前の石塊を睨んだ。

『すべて、私念といふ陋劣い心があればこそ、人間は種々の
 悪き企画あくわくを起すものぢや。罪惡の源は私念、私念あつての此
 世の乱れぢや。可いかな？ その陋劣い心を人間の胸から攘ひ淨
 めて、富めるも賤きも、眞に四民平等の樂天地を作る。それが此
 教の第一の目的ぢや。解つたぞな？』

恁う言ひ乍ら、渠はその目を移して西山の巔いただきを見、また、凹地
 の底の村を瞰下した。古昔の尊き使徒が異教人の國を望んだ時
 の心地だ。圧潰おしつぶした様に一列に列んだ茅葺の屋根、其処か
 らは鶏の声が間を置いて聞えて来る。

習そよとの風も無い。最中過さなかすぎの八月の日光が躍るが如く溢れ渡つ
 た。気が付くと、畠々には人影が見えぬ。恰度、盆の十四日であ

つた。

松太郎は、何がなしに生甲斐がある様な気がして、深く深く、
杉の樹脂^{やに}の香る空氣を吸つた。が、霎時^{しばらく}経つと眩い光に眼が疲
れてか、気が少し、焦立つて來た。

『今に見ろ！ 今に見ろ！』

這^{こんな}事を出任せに口走つて見て、渠はヒヨクリと立上り、杉の
根方^{あちら}を彼方此方^{こちら}、態^{わざ}と興奮した様な足^{あしどり}調^{まづ}で歩き出した。と、地
面に匍^{べたのたく}つた太い木根に躡^{つまづ}いて、其機會^{はすみ}にまだ新しい下駄の鼻緒^{あじ}が、
フツリと断れた。チヨツと舌鼓^{したうち}して蹲踞^{しゃが}んだが、幻想^{まぼろし}は迹も
なし。渠は腰に下げてゐた手拭^{あと}を裂いて、長い事掛つて漸々^{やうやう}そ
れをすげた。そしてトボトボと山を下つた。

穂の出初めた粟畷がある。ガサ／＼と葉が鳴つて、

『先生様ア！』

と、若々しい娘の声が、突然、調戯ふ様な調子で耳近く聞えた。
松太郎は畠はたと足を留めて、キヨロキヨロ周囲あたりを見廻した。誰も見えない。粟の穂がフイと飛んで来て、胸に当つた。

『誰だい？』

と、渠は少許すこし氣味の悪い様に呼んで見た。力サとの音もせぬ。

『誰だい？』

二度呼んでも返答こたへが無いので、苦笑ひをして歩き出さうとする
と、

『ホホヽヽ。』

と澄んだ笑声がして、白手拭を被つた小娘の顔が、二三間隔へだたつた
粟の上に現れた。

『何ぞ、お常ツ子かい！』

『ホホヽ。』と再笑またつて、『先生様ア、お前様狐踊踊るづア、
今夜俺こんいやおらと一緒に踊らねえすか？ 今夜こんいやから盆だず。』

『フフヽ。』と松太郎は笑つた。そして急しく周囲を見廻した。
『なツす、先生様ア。』とお常は厭迄曇りのないクリクリした
眼で調戯からかつてゐる。十五六の、色の黒い、晴やかな邪氣無あどけない小娘
で、近所の駄菓子屋の二番目だ。松太郎の通行る度、店先にゐさ
へすれば、屹度この眼で調戯からかふ。落花生なんきんまめの殻を投げることもあ
る。

渠は不図、別な、全く別な、或る新しい生甲斐のある世界を、お常のクリクリした眼の中に発見した。そして、ツイと自分も粟畑の中に入つた。お常は笑つて立つてゐる。松太郎も、口元に痘ひ攣つた様な笑ひを浮べて胸に動悸をさせ乍ら近づいた。

この事あつて以来、松太郎は妙に気がソワついて来て、暇さへあれば、ブラリと懐ふところで手をして畑を歩く様になつた。わが歩いてる径の彼方から白手拭が見える、と、渠は既うホクホク嬉しくてならぬ。知らんか振りをして行くと、娘共は屹度何か調らか戯つて行き過ぎる。

『フフヽヽ。』

と恁うマア、自分の威厳を傷けぬ程度で笑つたものだ。そして、

家に帰ると例^{いつ}になく食慾が進む。

近所の人々とも親みがついた。渠の仕事は、その人々に手紙の代筆をして呉れる事である。日が暮れると鍛冶屋の店へ遊びに行く。でなければ、お常と約束の場所で逢ふ。お由が何家かへ振舞酒にでも招^よばれると、密^{こつそり}乎と娘を連れ込む事もある。娘の帰つた後、一人ニヤニヤと可厭^{いや}な笑方をして、炉端に胡坐^{あぐら}をかいてゐと、屹度、お由がグデングデンに酔払つて、対手なしに悪言^{あくたい}を吐き乍^つら帰つて来る。

『何だ此畜生奴、汝ア何故^{なんしや}此家に居る？ ウン此狐奴、何だ？ 寝ろ？ カラ小癩^{きつねめ}な！ 黙れ、この野郎。黙れ黙れ、黙らねえか？ 此畜生奴、乞食^{ほいど}、癩病^{どす}、天理坊主！ 早速^{しらから}と出て

行け、此畜生奴！』

突然、這事を口汚く罵つて、お由はドタリと上框の板敷に倒れる。

『マア、マア。』

と言つた調子で、松太郎は、繼母ままははでも遇ふ様に、寝床の中に引擦り込んで、布団をかけてやる。渠は何日しか此女を扱ふ呼吸あしづらを知つた。悪口あくたいは幾何いくらつ吐いても、別に抗争てむかふ事はしないのだ。お由は寝床に入つてからも、五分か十分、勝手放題に怒鳴り散らして、それが息むと、太平たいへいな鼾いびきをかく。翌朝になれば平然けろりとしたもの。前夜の詫わびを言ふ事もあれば言はぬ事もある。

此家の門と鍛冶屋の門の外には、『神道天理教会』の表札が掲

げられなかつた。松太郎は別段それを苦に病むでもない。時偶ときたま近所へ夜話に招ばれる事があれば、役目の説教はなしもする。それが又、奈何どうでも可いと言つた調子だ。或時、瘦馬喰やせばくらうの嬢かかあが、小供が腹おそなへみづを病んでるからと言つて、御供おそなへみづ水を貰ひに來た。三四日経つと、麦煎餅を買つて御礼に來た。後で聞けばそれは赤痢あかびだつたといふ。

二百十日が來ると、馬のある家では、泊とまりがけ懸ばれうで馬糧ばれうの萩を刈りに山へ行く。その若者が一人、山で病付やみつけいて来て医師いしやにかかると、赤痢あかびだと言ふので、隔離病舎に収容された。さらでだに、岩手県の山中に数ある瘦村の中でも、珍しい程の貧乏村、今年は作が思はしくないと弱つてゐた所へ、この出来事は村中の顔を曇らせた。又一人、又一人、遂に忌いまはしき疫やまひが全村に蔓延した。恐し

い不安は、常でさへ巫女いたこを信じ狐きつねを信する住民ひとびとの迷信を煽り立てた。御供おそなへ水みづは酒屋の酒の様に需要が多くなつた。一月余の間に、新しい信者が十一軒も増えた。松太郎は世の中が面白くなつて來た。

が、漸々だんだん病勢さかんが猖獗さかんになるに従れて、渠自身も余り丈夫な体ではなし、流石に不安を感じぬ訳に行かなくなつた。其時思出したのは、五六年前——或は渠が生うまれむら村の役場に出てゐた頃かも知れぬ——或新聞で香竄葡萄酒かうざんぶどうしゆの広告の中に、伝染病予防の効能があると書いてあつたのを読んだ事だ。渠は恁ういふ事を云出した。『天理様は葡萄酒がお好きぢや。お好きな物を上げてお頼みするに病氣なんかするものぢやないがな。』

流石に巡査の目を憚つて、日が暮れるのを待つて御供水おそなへみづを貰ひに来る 嬌かかあども共なげなしは、有乎無乎の小袋ひつばたを引敝ひづくゑいて葡萄酒を買つて来る様になつた。松太郎はそれを 犧にへづくゑ卓卓に供へて、祈祷ひきをして歸す。残つたのは自分が飲むのだ。お由の家の台所の棚には、葡萄酒の空瓶が十八九本も並んだ。

奈何どうしたのか、鍛冶屋ひびきの音響ひびきも今夜は例いつになく早く止んだ。高く流るる天の河の下に、村は死骸の様に黙してゐる。今し方、提灯が一つ、フラフラと人魂の様に、役場と覺しき門から迷ひ出て、

半町許りで見えなくなつた。

お由の家の大炉には、チロリチロリと焚火が燃えて、居並ぶ種々の顔を赤く黒く隈取つた。近所の嬢共が三四人、中には一番遅れて来たお申婆さるばあも居た。

祈祷も御神樂も済んだ。松太郎はトロリと酔つて了つて、だらしなく横座よこざに胡坐あぐらをかいてゐる。髪の毛の延びた頭がグラリと前に垂れた。葡萄酒の瓶がその後に倒れ、漬物の皿、破茶碗かけぢやわんなどが四辺に散乱つてゐる。『其そんなに痛えがす？ お由よしどな殿、寝だら可えがべす。』

と、一人の顔のしやくんだ嬢が言つた。

『何なあに有あ！』

恁かう言つて、お由は腰に支つた右手を延べて、燃え去つた炉の柴を燻べる。髪のおどろに乱れかかつた、その赤黒い大きい顔には、痛みを懐へる苦痛が刻まれてゐる。四十一までに持つた四人の夫、それを皆追出して遣つた悪党女ながら、養子の金作が肺病で死んで以来、口は減らないが、何処となく衰へが見える。乱れた髪には白いのさへ幾筋か交つた。

『真箇だぞえ。寝れば癒るだあに。』とお申婆も口を添へる。

『何有!』とお由は又言つた。そして、先刻から三度目の同じ弁ひわけ疏を、同じ様な詰らな相な口調で付加へた、『晩方に庭の台木さ打倒つて撲つたつけア、腰ア痛くてせえ。』

『少し揉んで遣べえが』とお申さる。

『何有！』
なあに

『ワツハハ。』
けだる

懶い笑方をして、松太郎は顔を上げた。

『ハツハハ。醉へ工ばアア寝たくなアるウ、（と唄ひさして、）
寝れば、それから何だつけ？ 呴、何だつけ？ ハツハハ。あし
きを攘うて救けたまへだ。ハツハハ。』と、再びグラリとする。

『先生様ア酔つたなツす。』と、……皺くちやの一人が隣へ囁いた。

『真箇にせえ。帰るべえが？』と、その又隣りのお申婆へ。
おさるばあ

『まだ可えがべえどら。』と、お由が呌く様に口を入れた。

『こら、家の嬢、お前は何故、今夜は酒を飲まないのだ。』と松

太郎は再び顔を上げた。舌もよくは廻らぬ。

『フム。』

『ハツハハ。さ、私が踊ろか。^{わし}否^{いいや}、醉つた、すつかり酔つた。ハハ。神がこの世へ現はれて、か。ハツハハ。』と、坐つた儘で妙な手付。

ドヤドヤと四五人の跔音^{そと}が戸外に近いて来る。顔のしやくつたのが逸早く聞耳を立てた。

『また隔離所さ誰か遣られるな。』

『誰だべえ?』

『お常ツ子だべえな。』と、お申婆が声を潜めた。『先刻^{さきた}、俺ア来る時^{どき}、巡査ア彼家^{あすこ}へ行つたけどら。今日検査の時ア裏の小屋^{きのな}隠れたつけア、誰か知らせたべえな。昨日から顔色^{つらいろ}ア悪くてらけ

もの。』

『そんでヤハアお常ツ子も罹かかつたアな。』と囁いて、一同は密みんなそつと松太郎を見た。お由の眼玉はギロリと光つた。

松太郎は、首を垂れて、涎よだれを流して、何か『ウウ』と唸つてゐる。

跔音は遠く消えた。

『帰けえるべえどら。』と、顔のしやくつたのが先づ立つた。松太郎は、ゴロリ、崩れる如く横になつて了つた。

それから一時間許り経つた。

松太郎はポカリと眼を覚ました。寒い。炉の火が消えかかつてゐる。ブルツと身みぶる顫もたひして体を半分擡もたげかけると、目の前にお由

の大きな体が横たはつてゐる。眠つたのか、小動きもせぬ。右の頬片ほっぺたを板敷にベタリと付けて、其顔を炉に向けた。幽かな火光かすあかりが怖しくもチラチラとそれを照らした。

別の寒さが松太郎の体中に伝はつた。見よ、お由の顔！歯を喰絞つて、眼を堅く閉ぢて、ピリピリと眼尻の筋肉が痙攣にくひきつけてゐる。髪は乱れたまま、衣服きものも披はだかつたまま……。

氷の様な恐怖が、松太郎の胸に斧の如く打込んだ。渠は今、生れて初めて、何の虚飾なき人生の醜惡みにくさに面相接した。酒に荒んだ、生殖作用を失つた、四十女の浅猿あさましさ！

松太郎はお由の病苦を知らぬ。

『ウ、ウ、ウ。』

とお由は唸つた。眼が開き相だ。松太郎は何と思つたか、再ゴロ
りと横になつて、眼を瞑つて、呼吸を殺した。

お由は二三度唸つて、立上つた氣勢。けはひ 下腹が疼しびれて、便氣の塞そ
逼くはくに堪へぬのだ。眴じつと松太郎の寝姿を見乍ら、大儀相に枕頭を
廻つて、下駄を穿いたが、その寝姿の哀れに小さく見すぼらしい
のがお由の心に憐憫あはれみの情を起させた。俺が居なくなつたら奈何
して飯を食ふだらう？ と思ふと、何がなしに理由のない憤怒いかり
が心を突く。

『ええ此嘘うそつき吐者うそつき、天理も糞くそも……』

これだけを、お由は苦し気に怒鳴つた。そして裏口から出て行
つた。

渠は、ガバと飛び起きた。そして後をも見ずに次の間に駆け込んで、布団を引出すより早く、其中に潜り込んだ。

間もなくお由は帰つて來た。眠つてゐた筈の松太郎が其処に見えない。両手を腹に支つて、顔を強く顰しかめて、お由は棒の様に突立つたが、出掛けに言つた事を松太郎に聞かれたと思ふと、言ふ許りなき怒氣が肉体の苦痛くるしみと共に発した。

『畜生奴！』と先づ胴間声が突走つた。『畜生奴！ 狐！ 嘘吐うそ者つき！ 天理坊主！ よく聽け、コレア、俺ア赤痢に取付かれたぞ。畜生奴！ 嘘吐者！ 畜生奴！ ウン……』

ドタリとお由が倒のめつた音。

寝床の中の松太郎は、手足を動かすことを忘れでもした様に、

ビクとも動かぬ。あらゆる手頬の網が一度に切れて了つた様で、暗い暗い、深い深い、底の知れぬ穴の中へ、独ぼつちの魂が石塊いしこの如く落ちてゆく、落ちてゆく。そして、堅く瞑つぶつた両眼からは、涙が滝の如く溢れた。滝の如くとは這こんな時に形容する言葉だらう。抑へても溢れる。抑へようともせぬ。囁りついた布団の裏も、枕も、濡れる、濡れる、濡れる。……：

（明治四十一年十二月四日脱稿）

〔生前未発表・明治四十一年十一月（十二月稿）〕

青空文庫情報

底本：「石川啄木全集 第三巻 小説」筑摩書房

1978（昭和53）年10月25日初版第1刷発行

1993（平成5年）年5月20日初版第7刷発行

底本の親本：「スバル 創刊号」

1909（明治42）年1月1日発行

初出：「スバル 創刊号」

1909（明治42）年1月1日発行

入力：Nana ohbe

校正：川山隆

2008年10月18日作成

2012年9月17日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたつたのは、ボランティアの皆さんです。

赤痢

石川啄木

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>